

害の予防, QOL の確保へと降圧療法の目的が移っている。高齢者高血圧の特徴を十分認識しつつ, 個々の症例に最適な治療, メジカル, コメジカルとのチーム医療が臨床医に求められている。

3) 高齢者高血圧と QOL

大原 一彦 (県立吉田病院内科)

最近の高血圧治療において, 高齢者高血圧治療の占める割合が増大している。

高齢者高血圧の QOL における特徴は, 多病性であること, 年とともに身体的, 精神的機能が低下し, 社会的, 経済的にも失うものが多く, 喪失感を背景としており, 鬱状態が出やすいことがあげられる。そのため, 治療前にすでに QOL の低下の認められる場合が多く, したがって, 高齢者高血圧治療では, QOL をさらに低下させないように配慮すべきと考えられる。

非薬物療法の中で, 過度の塩分制限は, QOL を悪化させることが考えられ, 運動療法は, これを改善すると考えられる。

薬物療法は, ベトラの二重盲検試験のメタアナリシスによると, 6種類の降圧薬では QOL に悪影響を及ぼすものはなかった。中枢性交感神経抑制薬と血管拡張薬では, 有意な改善効果が認められず, ACE 阻害薬, β 遮断薬, Ca拮抗薬と利尿薬は, 有意な改善効果があったが, この改善効果は小さな改善効果で, 大きな差ではなかった。QOL へ及ぼす影響で, 特別優れている薬剤は無いと結論している。

高血圧治療は QOL 調査をしないと出てこないような自覚症状のあまり強くない症状, 他の日常生活からおこった症状と勘違いして医師に訴えないような症状, たとえば, β 遮断薬による鬱状態, 悪夢, 不眠, Ca拮抗薬による便秘, 腹部膨満感などの症状にも注意して治療する必要がある。これらの症状は, 多数例で検討するとわずかな差にすぎないが, 個々の症例では気をつけるべきであろうと考えられた。

II. 特別講演

「老年者における高血圧診療の最近の進歩」

東京大学医学部老年病学教授

大内 尉 義 先生

第13回新潟臨床電気生理研究会

日 時 平成8年3月15日(金)

午後6時~8時

会 場 新潟東映ホテル

1階白鳥の間

I. 一般演題

1) Magnetic search coil 法による眼球運動の解析

長谷部 日・高木 峰夫
阿部 春樹 (新潟大学眼科)

【目的】Magnetic search coil 法(サーチコイル法)は Robinson (1963) によって開発された電磁誘導の原理を利用した眼球運動測定法である。サーチコイル法は electrooculography (EOG) を初めとした他の眼球運動測定法と比べて精度が非常に高い上に測定可能範囲も広く, クロストークや眼瞼の存在によるアーチファクトが混入しないなど多くの利点を持っている。今回サーチコイル法を用いて脊髄小脳変性症(SCD)における水平方向サッケードの測定と解析を行い, 結果を正常被検者と比較した。

【対象】SCD 症例8名36~64歳(平均 51.8 ± 10.9 歳)および正常被検者11名(若年群6名21~34歳(平均 24.8 ± 5.4 歳), 高齢群5名61~75歳(平均 68.0 ± 5.4 歳))。

【方法】刺激視標は水平視角 $10 \sim 30$ 度・視標停止時間2秒で呈示した。SKALAR 社製サーチコイルシステム Eye position meter type3020 のシグナルを500 Hz でパーソナルコンピュータにサンプリングし, offline にてキャリブレーションを行い5ポイントの移動平均により平滑処理後解析した。

【結果】サッケードのトレースにおいて, SCD 群の各症例で dysmetric saccade と注視時の眼位の保持困難が明瞭に観察された。しかしサッケードの振幅と最大速度の関係について解析をおこなった結果, SCD 群8例中5名で最大速度は正常被検者群並に保たれ, 3名のみが速度低下をきたしていた。またサッケードの振幅-最大速度のプロットに Baloh (1975) の指数関数曲線でフィッティングを行った結果でも, SCD 群8例中7名で正常群同様に高い相関係数が得られ, 最大速度が著しく低下していた1名のみ有意な相関を得ることができ